様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２０４０

研究課題名（和文）「被爆者」から「ヒバクシャ」へ：グローバル・シンボルの生成発展過程の研究

研究課題名（英文）From hibakusha to Hi-Ba-Ku-Sha: Study on the Developmental Process of a Global Symbol

研究代表者
野宮　大志郎（Nomiya, Daishiro）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：２０２５６０８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は,第一に、被爆者が聖なるグローバル・シンボルとなるまでのシンボル化プロセスを明らかにすること、第二に、シンボルとしての「ヒバクシャ」が及ぼす影響を検証し明らかにすることであった。
　前者に関して、被爆者が聖なるシンボルとなるプロセスはいくつかの段階を踏むことが理解できた。後者に関して、「原爆ドーム存廃論争」と「自衛隊の平和公園行進論争」の２事例研究から、すでに1960年代、被爆者はシンボルとして非常に大きな影響を及ぼしていることが理解できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　被爆者を、実態としてではなく、グローバルシンボルとして捉え研究を進めたことにより、広島（被爆者）研究、グローバル化研究、社会運動研究領域での研究の進展に寄与する成果を提示できた。とりわけ、グローバル・シンボル研究領域では、シンボルが実態世界に影響を及ぼす過程を捉えることで、研究の裾を拡げることができたと考える。
　今日、実存としての被爆者が少なくなっている。戦後から続いた、リアルな被爆者の存在を起点にして平和を訴えるという構図がもはや存亡の危機にある。「ヒバクシャ」というシンボルが持つ影響力に注目することで、広島・長崎から将来も継続して平和を追求する作業が行えることの社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research was (1) to identify the process of symbolization and sanctification through which atomic-bomb survivors become a sanctified global symbol, and (2) to examine the extent of influence this symbol should exert in historical incidents in Hiroshima.
　The research result shows that the source of symbolization as a sanctified object can be found in the mental association between Jesus Christ and A-bomb survivors, as both died a innocent death, sacrificing their life and body for others, and that the process of symbolization consisits of several stages through which a real A-bomb survivor is elevated to an sanctified symbol. The research also shows that the A-bomb survivor as a sanctified symbol showed itself and exerted significant influence, when the numerous voices were raised during two big debates that occurred in relation to the preservation of the Atomic-bomb Dome and Japanese Self-Defence Forces' march into the Peace Memorial Park in Hiroshima.

研究分野：社会学

キーワード：グローバル・シンボル　ヒバクシャ　広島　意味変容

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
グローバリゼーション研究の領域では、文化的シンボルのグローバル化のプロセスについてはほとんど議論がなされていない。このことは、社会運動研究領域にも同様に当てはまる。例えば、ML キング氏がいかなるプロセスでグローバルな表象となるに至ったかについてほとんど議論がなされていない。戦後の「被爆者」を対象にした広島研究もまたしかりである。この領域では、被爆者を実存として捉え、その「生身の声」に注目する研究は多々ある。これらの研究の多くは、今日、被爆者が実存から一般的抽象物に転化するプロセスが進行することに対して危機感を訴える。しかし、視点を変え、今日の「ヒバクシャ」をすでに生成されたグローバル・シンボルとして捉え、その歴史的生成過程を考究する研究は、管見の限りでは存在しない。グローバル・シンボルとしての「ヒバクシャ」は世界を動かす力を持つ。にもかかわらず、研究が進められていない。この研究の空隙を埋めなければならない。
２．研究の目的
1945 年、広島・長崎で生まれた「被爆者」は、戦後数十年の間は実態的存在であった。しかし今日の「ヒバクシャ」は平和のグローバル・シンボルである。本研究では被爆者がグローバル・シンボルとなる発展ステージを解明することを第一の課題とし、グローバル・シンボルとしての影響力の程度を明らかにすることを第二の課題とする。すなわち、①ローカルで遠ざけられた「被爆者」は、いかにして、グローバルな平和のシンボルとなったのか、②「ヒバクシャ」というグローバル・シンボルはどのような影響力を持つのか、である。これらの問いに答えることが本研究の目的である。
３．研究の方法
本研究での第一の課題を達成するために採用する方法は言説の分析である。第一の課題を達成するために、戦後の新聞テキストや社会運動テキストをデータとして用い、「被爆者」がグローバルな「ヒバクシャ」となるに至るプロセスを同定する。このプロセスには、意味転換の局面が必ず存在する。この局面を掴み取るために、言葉の共起性に注目する。すなわち「被爆者」が語られる際に共起する他の言葉が持つ意味の変化に注意を払う。大量の言語データに対してシステマティックに分析をおこなうために、共起ネットワーク分析を用いて解析を行う。本研究の第二の課題を達成するために採用する方法はイベントを単位とした質的内容分析である。ここでは、「被爆者」への言及がなされたイベントに関連する言説の総体を一単位として取り上げ、そこでひろげられる言論や報告などの発話テキストを分析する。分析方法はテキストを読み込む伝統的な内容分析とならざるを得ないが、補助的作業として「hibakusha」や「ヒバクシャ」といった言葉の出現頻度分析や他の言葉との連関を見る多重対応分析を試みる。
４．研究成果
（１）本研究の第一の課題の達成のために、まず意味変容プロセスの概念図を作成することが必要になる。本研究では、意味変容は、段階的な変化を経ながら起こるものと想定することから始めた。その概念的な構成を提示したのが本研究である。ここでは被爆した者という実存的個人が、一般抽象的な概念として「被爆者」とカテゴリー化され、最後に平和のシンボルとなるという諸段階を仮説的に提案した。
（2018. 10. Nomiya, Daishiro. Invited Speech. “Dissecting the Process of Symbolization.” Paper presented in the International Conference：Public Diplomacy, Social Remittances in Korean Peninsula and Social Change in Asia and Europe. Institute of Philosophy and Sociology of the Polish Academy of Sciences. October 5-7, 2018. Warsaw. Poland.）
（２）（１）では意味変容の概念的段階図式を提案したが、その段階で起こる意味づけの変化が存在すること、さらには、その変化を捉えられることが第一の課題の達成のために必要となる。そのため 2011 年３月に福島で起こった原子力発電所爆発事故を事例として、「核なるもの」の意味変遷がいかにして起こったかを捉える試みを行なった。爆発事故の後、反核運動が日本各地に広がると同時に、1945 年に核により大きな被害を受けた国がなぜ、どのようにして核を受けいれるようになったのかという問いかけが言論界では大きな話題となった。なぜ、1945 年にはネガティブなはずだった核が、1970 年代にはそれに対する疑義も唱えられることなく受け入れられるようになったのか。分析の結果、1950―60 年代、日本政府の強いプッシュのもとである新聞社が原子力肯定の言説を多用する一方で、一般市民が自らの経済的利益のためにウラニウム鉱石の採掘に走る過程で意味転換が起きたと推測することができた。無気味な有害物であった核を幸福を生み出す財に意味変換する変容プロセスが起こっていたといえよう。
（2019.2. Nomiya, Daishiro. “Chapter2 Transforming the Ominous into Happiness: How Antinuclear Drive Was Tamed in the Post-War Japan?” in Pp.110-127. B.K.Nagla (ed.) *Issues and Themes in Contemporary Society*. Rawat Publications. India.）
（３）上記（１）（２）の後、本研究の第一の課題の達成のために行なった作業が、「意味ネットワーク」を用いて社会現象に対する意味づけの変化を捉える試みである。当初の研究計画通り、言説データを用いて「核」と「ヒバクシャ」概念を中心に共起ネットワークを作成し、意味ネットワークの変化を観察した。取り上げた事例は、1954 年と 2012 年の二つの反核運動であった。

その結果、二つの運動への意味づけはそれぞれの意味ネットワークによって再現できること、かつ二つの意味ネットワークの間に大きな変化があることを提示することができた。
（2019.11. Daishiro Nomiya, Isamu Sugino, and Risa Murase. 2019. “Social Movements as Network of Meanings: Constructing a Mental Map of 2012 Antinuclear Movement Campaign in Japan”. In pp. 158-174 *Economic and Social Changes: Facts, Trends, Vol.12, Issue 5*）
（４）、上記（１）～（３）を通して、本研究の第一の課題に答えるための仕事を行なった。ここでは（１）の意味変容プロセスの諸段階に修正を加え、さらに発展させた。すなわち、（１）では、意味変容過程を【実態的個人】＝＞【抽象概念としての「被爆者」】＝＞【平和のシンボル】と捉えたが、（２）・（３）の研究プロセスを経て、その意味変容過程を新たに【実態的個人】＝＞【抽象概念としての「被爆者」】＝＞【「被爆者」の聖化（sanctification)】＝＞【グローバル化の帰結としての「ヒバクシャ」】＝＞【平和のシンボル】と捉え直すこととなった。忌み嫌われた被爆者が平和のシンボルとして崇められるようになるには、被爆者が聖なるものになる段階がどうしても必要だという理解をここで提示した。さらに、長崎での調査結果から、その聖化には、イエスキリストとその使徒たちが他者のために死したことからくるアナロジーが働いた結果、原爆によって他界した人たちが「無辜の死」を経験した殉教者として理解されるようになったことがその淵源であるという理解に到達した。
(2019. 12. Daishiro Nomiya. “Change in the Meaning of Hibakusha: From the Deformed to the Symbol of Peace”. Invited Speech. Academic Conference titled “Sociology and Social Development from the Comparative Perspective”. December 13-14. 2019. University of Jinan, China.)
（５）被爆者が平和のシンボルとなるプロセスの探求は、本プロジェクト以外の領域でいくつかの研究に影響を及ぼした。まず、社会運動研究領域で、集合的記憶が社会運動にもたらすものの重要性をより強く意識するようになった。本研究の狙いは「ヒバクシャ」というシンボルが社会をどのように動かすかであったが、そのシンボル生成の過程を根元から支えるのが人々の集合的記憶である。本研究を通しての学習と理解が、運動研究で集合的記憶に注目することによって新しい運動研究の展開を示唆するとの主張につながったと考えている。
　同様の影響が、別の場所にて発表した学術的成果にも表れている。当時社会学の一般書籍を共同で執筆する作業に参加していたが、執筆を依頼された社会運動の章で、イッシューとなる事柄に新しい意味が付与されその結果意味変容が起きることが、運動が新しく起きる際の起爆剤となることを論じることができた。同様に、社会運動という行為に対して意味付与をするというプロセスが運動研究にとって重要な課題であること、またこの文化的プロセスを矮小化してしまうと、社会運動研究の大きなテーマを見過ごしてしまうことを主張する書籍レビューをも出版した。
（2020.1. 野宮大志郎. 2020.「特集　社会運動研究の新基軸を求めて　構造論的アプローチと行為論的アプローチの融合：社会ネットワークと集合的記憶を用いた考察」. 招待論文. In Pp. 1-25. *『社会学研究』第 104 号*.東北社会学研究会; 2021.1. 野宮大志郎.「第 13 章　社会運動」. Pp. 230–245 友枝敏雄(他)編著.『今を生きるための社会学』. 丸善出版; 2022.3. Nomiya, Daishiro. Book review. David Chiavacci and Julia Obinger (eds.) *Social Movements and Political Activism in Contemporary Japan: Re-emerging from Invisibility*. Routledge, London and New York. 2018. *Japanese Journal of Sociology*. Vol 31.）
（６）本研究の第一の課題に対して一定の解を得たのち、第二の課題であるシンボルとしての「ヒバクシャ」が及ぼす影響の理解に向けて研究を進めた。研究申請に記した通り、ここでは、戦後広島の歴史の中からシンボルとしての「ヒバクシャ」が大きく取り上げられた事例を採用し、その言説の内容から影響を読み取ることが必要となる。採用した事例は、1960 年代に頂点に達する「原爆ドーム存廃論争」である。この論争には、「ヒバクシャ」のイメージを利用するグループや「ヒバクシャ」が生き残った人々に対してもたらしたことを類推して議論するグループなど、多種多様なグループが参加している。広島市民の多くを巻き込んだこの論争は「ヒバクシャ」の心を継承するグループの活動に感銘を受けた市長が保存へ舵を切ったことで終結するが、平和のシンボルとしての「ヒバクシャ」はこの言論プロセス全体の基底をなしていた。これは、いずれのグループでも、自らの主張をなす際に「ヒバクシャ」に言及することで自らの正当化を行っていたことからも、理解できる。この研究成果は、書籍の一部として、また招聘教授として赴いたフランス・リヨン大学での講演にても紹介した。
(2023.3. Nomiya, Daishiro. “Voice of the Dead: Hibakusha Collective Memory against the Western Ethos.” Pp. 292-305. L.R. Berger eta.al eds. *Handbook of Post-Western Social Sciences: From East Asia to Europe*. Brill. London and Boston.; 2023.3. Nomiya, Daishiro. “Voice of the Dead: Hibakusha Collective Memory against the Western Ethos” Invited Lecturer. March 9, 2023. Ph D Seminar en la présence de l’Invité d’honneur

Professeur Dai Nomiya, Dialogue between Japanese and French Sociology, ENS Lyon-CNRS. University of Lyon, France.）

（７）上述の（６）は単一事例を用いての研究だったが、さらに事例を一つ増やし比較研究を行なった。比較のために付加した事例は自衛隊の平和記念公園への行進に関する賛否を問う言説空間である。比較の結果、原爆ドーム存廃論争同様、あるいはそれ以上にシンボルとしての「ヒバクシャ」がこの自衛隊行進論争の帰結に強い影響を及ぼしていることがわかった。すなわち、国家機関である自衛隊の行進プランに対して、「ヒバクシャ」概念から多様なシンボリックな意味づけを引き出し、それをレトリックとして使用することによって、当初のプランを大きく譲歩・後退させた事例として理解することができる。これら二つのいずれの事例でも、戦後の広島で湧き起こる論争はシンボルとしての「ヒバクシャ」によって駆動され、また道がつけられていることがわかる。

（2022.2. Nomiya, Daishiro. “Stranded Modernity: Post-war Hiroshima as Discursive Battlefield”. Pp.81-104 in Hatem Akil and Simone Maddanau (eds.) *Global Modernity from Coloniality to Pandemic: A Cross-disciplinary Perspective*. Amsterdam University Press. Holland.）

（８）上記の（６）と（７）に記した研究は本研究の第二の課題に答えることを目的として行なったものであったが、ここからさらに新しい着想を得た。すなわち、広島という都市に代表される日本の近代化のあり方である。明治維新以降 1945 年まで西欧を追従することを「近代化」とした日本は、戦後、少なくとも部分的には西欧とは異なる道を歩んだと考えられないだろうか。何がそうさせたのか。この答は確かに事実としては被爆であろうが、西欧に盲目的に追従する日本に戻さなかったのは、広島では、シンボルとしての「ヒバクシャ」を内面化した人々だったのではないかと考えるようになった。日本の戦後発展と「ヒバクシャ」との関連性は、今後の新しい研究の道筋を提示していると考えている。

　また、コロナ・パンデミックの影響から本研究期間の終盤になってようやく開始できたのが、被爆/被爆者研究で有名な広島大学原爆放射線医科学研究所との研究連携である。この連携作業では、いまだ誰も着手していない 1945 年 8 月以降から 1950 年初頭までの被爆者関連の言論空間を解明することを目的とする。すなわち、実体としての被爆者が概念としての「被爆者」（＝抽象化）となる過程の詳細を、新聞記事をデータ化し追跡する作業である。この作業は、本研究が終了した後も継続して進める予定である。これによって被爆者研究が今まで解明してこなかった抽象概念としての「被爆者」の登場プロセスをより明確に描き出すことができるようになると考えている。

（2023.3. “Stranded Modernity, anti-nuclear movements and civil society in Japan”, Invited Lecturer. March 10, 2023. Seminar Japanese Sociology and Post-Western Theory: Social Movements and Civil society, ENS Lyon-CNRS. University of Lyon, France.）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 野宮大志郎	４．巻 104
２．論文標題 構造論的アプローチと行為論的アプローチの融合：社会ネットワークと集合的記憶を用いた考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会学研究	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Daishiro Nomiya, Isamu Sugino, and Risa Murase	４．巻 12(5)
２．論文標題 Social Movements as Network of Meanings: Constructing a Mental Map of 2012 Antinuclear Movement Campaign in Japan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Economic and Social Changes: Facts, Trends, Forecast	６．最初と最後の頁 158-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Daishiro Nomiya	４．巻 31
２．論文標題 Book Review on David Chiavacci and Julia Obinger (eds.) Social Movements and Political Activism in Contemporary Japan: Re-emreging from Invisibility	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Japanese Journal of Sociology	６．最初と最後の頁 133-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　8件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Daishiro Nomiya
２．発表標題 Change in the Meaning of Hibakusha: From the Deformed to the Symbol of Peace
３．学会等名 Academic Conference titled “Sociology and Social Development from the Comparative Perspective,December 13-14. 2019. University of Jinan, China（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Daishiro Nomiya
２．発表標題 Japanese Sociology and Historical Legacies
３．学会等名 Seminar Japanese Sociology and Post-Western Theory: Traditions and Heritages, ENS Lyon-CNRS.University of Lyon, France.（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Daishiro Nomiya
２．発表標題 Stranded Modernity, anti-nuclear movements and civil society in Japan
３．学会等名 Seminar Japanese Sociology and Post-Western Theory: Social Movements and Civil society, ENS Lyon-CNRS. University of Lyon, France（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Daishiro Nomiya
２．発表標題 Voice of the Dead: Hibakusha Collective Memory against the Western Ethos
３．学会等名 Ph D Seminar en la presence de l’Invitee d’honneur Professeur Dai Nomiya, Dialogue between Japanese and French sociology, ENS Lyon-CNRS. University of Lyon, France.（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Daishiro Nomiya
２．発表標題 Beyond Multiple Sociologies: A New Direction in Sociological Endeavor in East Asian Societies
３．学会等名 Academic Conference titled “Sociology and Social Development from the Comparative Perspective,December 13-14. 2019. University of Jinan, China（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Daishiro Nomiya
２．発表標題 “Dissecting the Process of Symbolization: From Wounded Individuals to the Symbol of World Peace in Post War Japan.”
３．学会等名 Public Diplomacy, Social Remittances in Korean Peninsula and Social Change in Asia and Europe. Polish Academy of Sciences. October 5-7, 2018. Warsaw. Poland.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Daishiro Nomiya
２．発表標題 “Transforming “the Deformed” into “the Sacred”: Social Construction of Hibakusha in the Post-war Japan.”
３．学会等名 Paper presented in the World Congress of International Sociological Association. July 15-21, 2018. World Convention Center. Toronto. Canada.（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計6件

１．著者名 Daishiro Nomiya in Laurence Roulleau Berger et al (eds.)	４．発行年 2023年
２．出版社 Brill, London and Boston	５．総ページ数 998
３．書名 Laurence R. Berger et. al. (eds.) Handbook of Post-Western Social Sciences: East-West Dialogu	

１．著者名 Daishiro Nomiya	４．発行年 2022年
２．出版社 Amsterdam University Press, Holland.	５．総ページ数 402
３．書名 H. Akil and S. Maddanau (eds.) Global Modernity from Coloniality to Pandemic: A Cross-disciplinary Perspective. Pp. 81-104	

1．著者名 Daishiro Nomiya	4．発行年 2021年
2．出版社 Rawat Publications. India	5．総ページ数 284
3．書名 B.K. Nagla (eds.) Diversity, Democracy and Development	

1．著者名 野宮大志郎	4．発行年 2021年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 344
3．書名 友枝敏雄（他）編著．『今を生きるための社会学』「第13章　社会運動」．Pp.230－245	

1．著者名 Daishiro Nomiya	4．発行年 2019年
2．出版社 Rawat Bublications. India.	5．総ページ数 356
3．書名 B.K.Nagla (ed.) Issues and Themesin Contemporary Society. Pp. 110-127.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	久保田　明子 (Kubota Akiko) (40767589)	広島大学・原爆放射線医科学研究所・助教 (15401)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関